



TITLE:

1982年度 物性若手夏の学校報告

AUTHOR(S):

CITATION:

1982年度 物性若手夏の学校報告. 物性研究 1983, 39(5): 247-248

ISSUE DATE:

1983-02-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/90843>

RIGHT:

1982 年度 物性若手夏の学校報告

阪大物性若手グループ

I 開催後記

82年度の物性若手夏の学校は、長野県戸隠村に於いて、7月25日から7月30日までの6日間、開催され、連日の雨の中、学生、教官、一般を合わせ、三百名を超える参加者があった。

今年度も、従来通り午前と午後に分け、午前中の全体講義は、マスターコースを主な対象とし、“物理的イメージ”を把握できる講義をと、講師の先生方をお願いした。午後のサブゼミは、ドクターコースを主な対象とし、発表形式で行なった。

ここ数年来、夏の学校は、参加者の減少、特にマスターコースの参加者の減少が問題となっていたが、より多様な専門分野の人にも発表の機会を与え、分野を越えて活発な議論ができる様に、ポスターセッションを設けた。

また、聴講者の選択の余地を広げ、より多くの話題と接することができる様に、従来の二期制を三期制に変更してみた。

残念ながら、参加者の大半はマスターコースの学生で、ドクターコースの参加者は多くなかったが、参加者は増え、盛会であったと言えよう。また、参加者を対象としたアンケートの結果でもまずまず好評であった。

しかし、ドクターコースの参加者の減少、全体講義が集中講義的であること、物性分野の多様化によって夏の学校の内容が肥大化し企画が難しくなっていること、物価の上昇により学生の金銭的負担が増大していることなどの、夏の学校の諸問題が解決されたわけではなく、より良い形式が望まれる。

以下は、全体講義、サブゼミ、ポスターセッション、特別講演に分け、各々について細かく振り返って見たいと思う。

II 日程

○ 全体講義

25, 26 日

井野正三（東大理物理）「表面の実験的解析」

張紀久夫（阪大基物性）「励起子とポラリトンの物理」

福山秀敏（東大物性研）「アンダーソン局在」

阪大物性若手グループ

星埜禎男（東大物性研）「超イオン伝導体」

森 肇（九大理物理）「非線形非平衡の物理」

27・28日

国府田隆夫（東大工物工）「分子性結晶における素励起」

三本木孝（北大理物理）「低次元物質の物性」

戸田盛和（横国大工応数）「非線型振動と波動」

松田博嗣（九大理生物）「統計物理学から見た生命現象」

宮下 忠（電電公社茨城通研）「光ファイバー通信」

29・30日

一丸節夫（東大理物理）「強結合プラズマ」

久保亮五（慶大理工物理）「線型応答理論再考」

菅野 暁（東大物性研）「固体表面における低エネルギー分子・原子の散乱」

長谷田泰一郎（阪大基物性）「新しいタイプの規則配列状態とその相転移」

安岡弘志（東大物性研）「The Nuclear Magnetic Resonance in Magnetic Material」

。サブゼミ

25・26日

アモルファス「アンダーソン局在」

格子欠陥「格子欠陥のトピックス」

光物性「励起子とポラリトン」

物性基礎Ⅰ「ランダムと非線形」

物性基礎Ⅱ「カオス」

29・30日

磁性「スピンのゆらぎ」

低温「低次元の超伝導」

表面物性「表面における非断熱過程」

誘電体「強誘電体の相転移」

。ポスターセッション

28日